

## 年間第 19 主日 8 月 8 日 分かち合い

今日、8月8日は、東京オリンピックの最終日、閉会式の日。しかし、日本の教会にとっては、6日(広島)と9日(長崎)に挟まれた大事な祈りの日です。

76年前のことを知る人、直接体験した人が年々少なくなってゆくとき、その日にあったことと、その意味を考えることは、一層大事になってきます。広島では、5日の夕方、当時広島のイエズス会修練院の修練長をしておられたアルペ神父について、酒井神父が講演をされました。今年、秋まで、平和公園の平和祈念館で、当時広島にいて被ばくした15人のイエズス会員の残した言葉や写真が展示されています。アルペ神父は、爆心地から5kmしか離れていない長束修練院の聖堂に被爆者を一時は150人も受け入れ、可能な限りの治療に当たられたことはご承知の通りです。

1981年には、教皇ヨハネ・パウロ2世が「戦争は人間のしわざです」という言葉で始まる平和アピールを発表され、2019年には、フランシスコ教皇が、短時間ではありましたが、平和公園に立ち寄り、お言葉を述べられたことはまだ記憶に新しいこと。

原爆の犠牲となられた多数の方々、また、そのご遺族の方、命は助かったが、その後、ずっと傷を持ち続けてこられた方のことを考えると、今日のみ言葉は、多くのことを語っているように思えます。

第一朗読の『列王記』の中で、預言者エリヤは、主への忠実と奉仕のために全力を尽くした結果、イスラエルの王から疎まれ、命を追われる身となります。エリヤは荒野に身を隠し、主に祈ります、「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください」と。大きな痛みや痛みの中で、どれほど多くの方が、同じような叫びをあげたことでしょう。しかし、エリヤは、痛みの中で、眠り、目を覚ますと、枕元にパン菓子と水の入った瓶を見、それを食べ、水を飲むと、あらたな力をいただいて、神の山にまで歩きます。そして、エリヤが山のふもとで、さらなる使命を受けて、働き続けたことが列王記には記されています。広島にせよ、長崎にせよ、あれほどの悲惨と痛みの中から立ち上がり、今日の繁栄を築いたのは、そうした苦しみにも耐え、復興というあらたな使命のために献身した多くの方々、また、中国地方や長崎の教会も、そうした苦しみを経験した司祭・修道者・信徒の方々の献身の賜物であることを思い起こしましょう。

ヨハネ福音書は、先週に続いて、6章の「いのちのパン」の話が読まれました。ヨハネは、イエスがわずかのパンから5000人の人に食べさせた、その不思議な出来事を記すだけでなく、そのことの意味を解き明かそうとしていることは、先週もお話しました。今日の箇所には、今まで出てこなかった「ユダヤ人」という言葉が出てきます。ヨハネ福音書の中で「ユダヤ人」は、「イスラエル人」と異なり、神の言葉を受け入れようとしない、頑なな人々を指す言葉として使われています。群衆に代わって登場する「ユダヤ人」は、イエスをあくまで、ヨセフの息子、その父も母も知っている、いわば、イエスは自分たちの理解を超えた人物であるはずがないと決めつけ、イエスの言葉を素直に受け止めようとしない人々です。「わたしは天から降ったパンである」など、とうてい受け入れられない主張なのです。

そして、そうしたユダヤ人たちの態度を見抜いてイエスは言われます、「父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない」。「父から聞いて学んだ者は、皆、わたしのもとに来る」と。これは、人間が自分の限りある知識・理解力を超えて、神ご自身が人の心を照らし、導かれる時、そして、自らのうちに信じる心が生まれてはじめて神の世界に触れることができる、ということではないでしょうか。あくまでも、人間的な思い、判断に固執する限り、決して、神の言葉を受け止めることができない、ということの意味するのではないのでしょうか。

イエスが自らを「天から降ってきた生きたパンである」と言い、「わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉である」と言われる時、イエスのご自分がそのような、人間を神の世界に導く、いのちの糧であり、それをいただくもしない限り、つまり、信じることをしない限り、神の世界に至ることができない、と教えておられるのです。

エリヤが、神が用意されたパン菓子を食べ、水を飲んで、歩き続けることができたように、わたしたちに残されたイエスの体であるパンをいただくことによって、人生の中で、繰り返し襲ってくる苦しみ、悩み、痛みを耐え、主が示される地にいたるまで、歩き続けることが出来るよう、共に祈りましょう。(S.T.)